NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR PARAPSYCHOLOGY

April 1979 No. 13

超心理学文献紹介

萩尾宣樹：ESPと記憶(1)「鹿児島短大論集」19, No.4 S. 54 115～135

萩尾氏は、ESPが通常の心理的課程の中で最も関連が深いのは「記憶」であろうと予想し、最近のESPと記憶の関係を扱った論文を"研究ノート"としてまとめることを試み、本報告ではW. G. Roll: ESP and memory, Int. J. Neuropsychiatry, 1966, 2, 505-521の要約を試みた。

本報告最後に述べられている〔まとめ〕は次の如くである。

われわれが記憶過程の中に学習、保持、想起、忘却のそれぞれを区別するならば、ESP反応は、有機体がその過去の感覚的経験や、他のよく知られた活動のコース（行程）の中で学んだ事柄を想起する例だと記述することができる。ESP過程のこの部分はふつうの心理学的、生物学的過程である。それはとりも直さず、人が感覚的、理性的手段によってはわれわれが超心理学的現象を取り扱っているのだと知ることのできないある実際のできごとに、喚起された記憶が相応するという証明（証拠）があるからである。世界のいろいろな時、いろいろな場所でおこなわれたESP研究を見わたしてみると、ESP反応が受け手自身の記憶痕跡から成り、それゆえ、それは学習や想起を支配する"法則"や条件に従属する（支配される）ことが示される。

トピックス

◎ イタリア、シシリアに、3代に亘って超常的能力を示す一家がある。家族の一人娘のサンディナについてESPテストを行った。1053 runs, dev.: +2201, CR: 33.91が得られた。

◎ ミラノ市の中心街でpoltergeistが起った。現象は2人の社会的地位のある教養ある2人の若者の眼前で起った。これは、超心理学の歴史の中でも非常にユニークなケースである。(METAPSICHICA, Anno XXIII, Numero Unico, 1978より)

学会ニュース

第132回 月例研究会 1979年4月22日 10.00～16.00、東京都教育会館にて開催。出席者：金沢元基、金子春雄、大谷宗司、長野一、山田輝明 3つの報告が行はれた。渡辺恒夫氏談 Psi, Psychotherapy and Psychoanalysis., by Ehrenwald が金沢氏により紹介され、続いて笠原氏による Batchelor の行った Bele Levitation の実験についての紹介（要旨本号掲載）山田氏による Roots of Consciousness. by Mishlove の紹介（要旨本号掲載）が行はれた。また笠原氏による"Survial Problem"についての研究分科会の提案がなされ、近く同氏による呼びかけがある予定。

お知らせ

第133回 月例研究会 下記要領で行います。

1979年5月20日(日) 10.00～16.00

於 東京都教育会館・東京都新宿区市谷砂土原町 16

(03) 260-3261

〔地下鉄 東西線 神楽坂下車 徒歩3分〕

Handbook 輪読 J. A. Palmer: Attitudes and Personality Traits in Experimental ESP Research

解説者 祝 輝之　部分者 金沢元基

文献紹介 S. Guarino: Thermodynamic Radiation

部分者 大谷宗司

談話 念写研究の実験計画について

NEWSLETTER 1979年4月22日 発行 ©

編集 発行：日本超心理学会 会費200円

Brookes-Smith, C. and Hunt, D.W. :
Some experiments in psycholinesis. J. Soc. Psych. Res., 45:265-81, 1970.

紹介者 笠原敏雄

第一部（C. B.-S.）

序論

過去には、"物理現象"という形をとって現われる偶発的霊媒現象が真正なものか否かについて議論されていた。この種の現象は、とらえどころがないし、極にしか起こらず再現性がなく、かつ手品でまねることが可能だという理由から、ふかかしの研究者はこの方面の研究をさしひかえていた。しかし4年ほど前に発表されたK.J.バチェルダの報告があらわれてから事態は好転した。バチェルダによれば、参加者の心理的「規則」に従いさえすれば、"物理霊媒"などいなくとも、超常現象を実験的に起こすことはそう難しいことではないという。「瞬間的な記念」があってそこの種の現象は発現が妨げられるので、現象が生起することを信じ期待することが不可欠の条件だと云う。さらに、目撃抑制witness inhibitionと保持抵抗ownership resistanceという現象がPK発現には負の作用をそなえるため、実験場面を暗くしてない方がよいとされる。そこで暗中記録計を考察し、それを実験に用いることにした。フィルムを内蔵しているこの記録計は、光にはもちろん、フィルム上に加わった力等をオッシログラフの形で記録できるものである。

第二部（D. W. H.）

Sittingの第1シリーズ

参加者は著者のひとり（D.W.H.）を含む4名で、女性がそのうちひとりいた。1968年10月に開始されたこの実験は、はじめは、107×61×56センチの大きさで18kgの重さのテーブルを浮揚させることを目的としていた。心霊研究に関心を持ち、バチェルダの著作を読んでいた4名は、テーブルの表面に軽く両手を置いて、完全に明かるいところで実験を開始した。第1回目の時に、どうやらテーブルの表面から叩音とラップが聞こえたようだった。第2回目にはテーブルが傾いた。数回後には、正確なコントロールができないくらい、まだけがをする可能性があるくらい激しくテーブルが動いた。そしてついにテーブルが床から1.5～1.8mほど浮揚し、手が届かない高さに持ちあがるまでになった。この段階では自由に実験を行ない、その結果、テーブルがしゃ[illegible]合わせて踊ったり、命じられた方向に一本足でとびはねたりという現象も起こった。会を重ねるにつれてこのような現象の新奇性は薄れ、整理がされ、現象そのものそれと併行して下降線をたどり、ついには終息した。

Sittingの第2シリーズ

1969年9月に開始され、暗中記録計を用い、すべて暗黒条件下で行なったが、慣れるとよく見える程度のセーフライトは用いた。

第1回目のSitting

暗中記録計をテーブル上に置いて実験を開始したが、何も起こらなかった。

第2回目のSitting

やはり記録計をテーブルの上に置いたが、手をテーブルの上にのせて、従来通りのやり方をとった。テーブルはガタガタゆれたりとびあがったりしたが、記録計が故障してうまく作動しなかった。

第3回目のSitting

テーブルの上の記録計を跨いで合板の薄板が置かれた。はじめこの板の上に手をのせていたが、まずこの板が浮揚し、次いで記録計が、さらにはテーブル自体が激しくゆれはじめた。合板は三枚に離れてしまった。ゆれがおさまりかけたのを見はからって記録計を下におろし実験を続けたが、4名の同時にテーブルから手を離したところ、テーブルが坐っている位置からさらにとびあがった。最後には全員の手の届かない高さまで浮揚し、床に墜落した。その後記録計のフィルムを引きだし部屋の隅のテーブル上で現像をしたが、定着が終了し電気をつけると、現像液ののっているテーブルが激しくとびはねひっくりかえった。

その後の実験

以上の一連の実験のあと、今度はテーブルを動かすことをやめて、記録計そのものに直接作用を及ぼすことを考えた。この実験では6回叩音が聞こえたが、電灯をつけた後、テーブルから離れたところにあるイスがゆっくりと近づいてくるのが観察された。これにヒントを得て、テーブルから75cmほど離れたところにあったスイッチをテーブルの上の電灯と結びつけて、PKによりこれを

点灯させることができるかどうか実験することにした。その結果、この電灯を口頭命令で、自由に、つまり、点灯回数、速度、間隔を自由に変えて点灯させることに成功した。以上の現象は次の実験会でも反復できた。そこで今度は批判的な観察者、参加者をひとりかえて実験を行なったが、現象は同じように生起した。

※名中唯一の女性が結婚のためグループから抜けた後、この現象を起こすことはできなくなった。

Jeffrey Mishlove: The Roots of Consciousness. A Random House, 1975.

かなり自由奔放に書かれた、超心理学の教科書風な本である。1975～1977年の間に40,000部も刷られていることからみて広く読まれているものと思われる。

著者J. Mishloveは California 大(Berkeley)にて、最近超心理学でPh. D.を取得し、現在いくつかの大学で超心理学のコースを受け持っている。この本は彼の博士論文をもとにして書かれたものであるが、博士論文の持つ堅苦しさは無く400枚にものぼる写真や美しい図版とあいまって、楽しみながら超心理学の過去と現在の状況を知るには好適な本である。参考文献で約600件と多い。ただし内容は超心理学のみならず、ヨーガ、神智学、占星術、UFO、までも含まれており、カウンターカルチャーの拠点としてのカリフォルニアのにおいが出る本となっている。

本書は、Section I, II, IIIの三部分から成っている。Section Iでは History of the Exploration of Consciousnessと題して、古代エジプト、インド、中国、ギリシャ、ローマ等における神秘主義思想の紹介に始まり、カバラ、錬金術、魔術、中世神秘主義、秘密結社、位星術、を経て、ケプラー、ベーコン、ライプニッツ、バークレー、ニュートン、スウェデンボルグ、ブレイク、ゲーテ、メスメルと続き、19世紀の心霊研究の紹介で終る。

Section IIでは、Scientific Approach of Cons.と題して現代超心理学とその周辺領域が紹介されている。「ESP」(Rhine, Geller, Schmidt, Dean, Schneidler, Ryzl, Stanford, etc.)、「OBE」(Tart, Harry, Morris, Tanous, Sudu, Sherman, etc.)「Healing」(Cayce, Bender, Grad, etc.)、「PK」(Rhine, Geller, Owen, Schmidt, etc.)「転生」(Osis, Roll, Lodge, Stevenson etc.)、「UFO」、又「Physiological Mechanisms of Cons」なる章では、Bio-feedback, Drugs, バイオリズム、生体と磁気、オーラ、キルリアン写真、オルゴンエネルギー、ハリのツボ、などが扱われている。

Section IIIのPeople, Places, and Theoriesでは超常現象に対する理論的なアプローチが紹介される。A.M. Young氏の奇抜な理論はさておき、物理学者Dr. J. Sarfattiの"The Physical Roots of Consciousness"なる一文は一読の価値があるかもしれない。彼はCalifornia大の有名なLaurence放射能研究所の物理学者達とタイアップして、Physics/Consciousness Research Groupを率い、SRI(Puthoff, Targ)やUniv. of London(Taylor, Bohm)での研究を発展させようとしている。T. Roszakは、彼のことを新神秘的物理学者と呼び、科学的世界観と呼ばれる独房の内部をその変わった趣味に合わせて再装飾する実験的熱情を持った者としているが、

(「意識の進化と神秘主義」)。
紀伊國屋 1978 参照.

紹介者 山田輝明.